

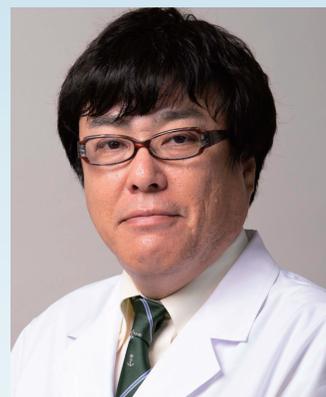


羅針盤

森脇 真一

Shinichi Moriwaki

大阪医科薬科大学医学部感覚器機能形態医学講座皮膚科学 教授



光皮膚科学～believe in a bright future

毎年、夏になると浅黒く焼けた肌を自慢する若者が多くみられる。小麦色の肌は一見、健康的にみえる。

われわれヒトが地球上で快適な生活を維持できるのは太陽がもたらす恩恵である。太陽紫外線はビタミンD合成のfirst stepに必要であり、皮膚科医は外来では頻回に光線療法を実施している。一方で太陽光線は炎症、老化、がん、免疫抑制など皮膚へ悪影響を及ぼし、光線過敏症を生じさせる。

光線の皮膚への作用、光線関連疾患の病態解明と治療、光線を使った疾患の診断や治療、光防御などを研究する学問が光皮膚科学、光生物学である。ところがここ10年、国内外の皮膚科関連学会において光皮膚科学、光生物学に関する講演、演題が減少してきている。私が留学から帰国した翌年、参加した1995年のAAD (American Academy of Dermatology) のプログラムを再チェックしたところ、photobiology, phototherapy, photoprotectionなど光線関連での教育セッションが多くあった。ところが、2024年のAADでは300ある教育セッションで光線関連はphotoprotection 1つのみ、2024年のJDAでも教育講演55題のなかで光線関連は「光老化を予防する」の1つのみ(しかもこれは筆者自らオーガナイザーとなって日本化粧品学会から応募したもの)である。光皮膚科学に興味をもつ若手の新規参入も少なく、専門家はどんどん高齢化しつつある。

私自身、光皮膚科学では重要な疾患の一つである色素性乾皮症という遺伝性光線過敏症から、細胞生物学、分子生物学、生化学の手法を学び、難病患者に対する医療を長年模索してきた。その過程で、もちろん光皮膚科学は中心に据えているが、そのボーダーを超えて遺伝学、分子疫学、美容皮膚科学、化粧品学、小児皮膚科学などの分野にまで視野を拡大してきた。

ヒトと太陽の共存は今後も続くが、光線の皮膚への影響、光線による皮膚疾患の病態や光線療法の作用機序などまだまだ完全に解明されたわけではない。可視光線、近赤外線の影響はcontroversialである。日光蕁麻疹、多形日光疹、慢性光線性皮膚炎などの内因性光線過敏症の根本原因はまだまだ不明である。欧米ではすでに危惧されている、サイアザイド系降圧薬配合薬の日本人での発がんリスクは今後の検討課題である。光線治療機器も近年多く上市され、適応拡大が期待される。色素性乾皮症に関していえば新規相補性群(J群)が同定されようとしている。多くの先人達が成し遂げてきた光皮膚科学の潮流を今、止めてはならないし、光皮膚科医が絶滅危惧種になってはならない。

本特集号では光皮膚科学に関する最新の多くのTOPICSを散りばめている。ぜひ楽しんで読んでいただき、少しでも多くの若手皮膚科医に、一度光皮膚科学の門をくぐっていただくことを待望する。